M女戦記
TS
リボルバー

## ０．プロローグ

それは、突然来た。
「あれ」
市役所の自分の机から立ち上がった瞬間、目の前が暗くなった。
胸が苦しくなった。
思わず胸に手を当てた。いつもならこんな時は動機が激しくなっているのだが…。
（おかしい…心臓が動いていない…）
そのまま、意識が漆黒の闇の中に落ちた。
これが私の、転生前の最後の記憶だ。

今私は、バザールの武器屋の店先にいる。
目の前にあるのは、昨日打ちあがったばかりだという勇者専用の剣。
「欲しい」
そう思った。
この剣は、勇者属性がなければ柄を握ることすらできない代物だ。
でも私は一応「職業・勇者」なので握ることまではできる。
私は懐から「勇者認定書」を取り出して、店の主人に見せ、とりあえず持たせて欲しい、と頼み込んだ。
店主はもみ手をしつつ愛想笑いを浮かべ、「お嬢さん、どうぞ」という。
あ、言い忘れたけど今の私の姿は、１０代の少女だ。名はネム。
前世の、３０歳で死んだ地方公務員の男の記憶を持ったまま、この世界で新たな生を受けた。
前世の記憶というやつは、生まれたばかりの時には誰にも残っていて、５歳ぐらいまでに消え失せてしまうものだそうだけれど、私の場合は真逆だった。
物心ついてからしばらくたったある日、突然冴えない中年男の意識が私の中に湧いて出たのだ。
その意識は、最初は数日おきに数分程度出るだけのものだったが、だんだんと出現頻度が高くなり、ついには元の私の意識と完全に一体となってしまった。
いや、元の世界のおっさんの意識が、この世界の私の記憶を受け継ぎ、意識を吸収した、というのがより正確な表現かも知れない。
いずれにしろ今の私は、外見は少女、中身はおっさん。毎日ファンタジー世界でエンドレスなコスプレをしているような感覚で日を送っているのだ。

そんなわけで。

前世で言うところの「ファンタジー世界の少女勇者」に転生した私は、勇者にしか使うことを許されていない武器を試し振りしようとして今、武器屋にいる。
剣の柄を握った。
一般人ならここで全身が雷に打たれたように痺れてしまうのだが、そこはそれ私は勇者。
握るところまでは問題なくできる。
勇者は、選ばれた存在なのだ。
両手で柄を握りしめた私は、どちらかというと華奢な方の腕に力を入れて、剣を持ち上げようとする。
そのまま頭上に持ち上げ、いかにも勇者っぽい決めポーズを取ろうとした…のだが。
おかしい。
持ち上がらない。
剣が重いのだ。
「おじさん」
私は武器屋に尋ねた。
「これ重すぎないですか？」
武器屋の店主は、愛想笑いを浮かべたまま答える。
「いや低レベル用の勇者剣ですから、勇者認定を受けたばかりの方でも持ち上げられるはずですよ」
「ええ～でも重いんですけどぉ」
店主の愛想笑いが、ちょっと変化した。
明らかにこちらをちょっと馬鹿にした目で見てる。
これまでの勇者人生、ありとあらゆるところで私に向けられてきたのと同じ目だ。
普通の勇者なら、こんな目で見られると屈辱を感じ、「今に見ていろ！」と思うんだろう。
私もとりあえず、というか普通の勇者以上に屈辱を感じている。
でもそれだけじゃないのだ。
いつの頃からか、私はこの手の視線で見られると、屈辱と一緒に背筋にぞくぞくっとした感覚が走るのを覚えるようになったのだ。
この感覚を味わった後、股間が濡れるようになったということに気づいたのは、さらにもうちょっと後だった。
そういう私の心のうちを知ってか知らずか、徐々に視線に軽蔑の色を深めてきた店主は、店の隅から火かき棒を取り出し、私が掴んでいる剣の刃の下に入れた。
一般人が柄を握ったら大変なことになるのだが、こういう触り方なら影響は出ないのだ。
店主は無言で、そのまま指先だけにちょいと力を入れる。
刀身はあっけなく上がった。
「あ…」
店内に広がる、気まずい沈黙。

「もう少し身体をお鍛えになれば、持ち上げられると思いますよ」
「え、ええ…そうですね」
「どうします？　その時のために今買っておきますか？」
「あ、ああ…そうですね。いや、ちゃんと持ち上げられるようになってから、改めてお邪魔します」
「承知しました。まあすぐでしょうから、ご予約ということにしましょうか？」
「い、いえ…他にこういうのを欲しがる初心者勇者がいたら、そちらの方優先で構いません」
店主の愛想笑いがニヤニヤ笑いに変わっている。
この親父、どうやら私がいくら努力してもレベルアップできないダメ勇者だということを見抜いたらしい。
口では「すぐに持ち上げられるようになりますよ」とか言いながら、その日が来そうもないことに気づいていて、私を嘲っているのだ。
悔しい。とてつもなく悔しい。
でも同時に背筋に変な感覚が走る。
股間にはしたない汁が溢れてしまう。
このまま嘲られてイッてしまいたい、いや勇者としてそんな屈辱を味わうわけには…でもそれでこの街にいられないぐらいみんなから蔑まれるとそれはそれで気持ちよさそう…
一言どころか本の数冊分の字数を費やしても説明しきれないぐらいの複雑な思いが、私の脳裏をぐるぐると駆け巡った。
結局…私はあは、あはとちょっと足りない感じの笑みを浮かべながら、武器屋を後にした。
「またいらっしゃい」
店主が私の背中に言葉を投げる。脚がやや不自然に内向きになり、膝の頭をわずかに震えている。
「…」
店主は黙ってそんな私の後ろ姿を見つめている。
（濡れているの、バレてるな…）
もっと蔑みの視線で見られたい、とちょとだけ後ろ髪を引っ張ろうとする自分を叱りつけながら、私は家路を辿った。

言ってはなんだが、私の家は豪邸である。
何代にも渡って国や世界の危難を救った、大勇者大魔法使い大格闘家を輩出し続けた名家なのだ。
とは言っても、私はこの家の本当の子ではない。
養子である。
物心ついたころ、つまり公務員のおっさんの意識が復活しはじめたばかりの頃、私は流し

の聖職者によって「勇者としての適性あり」と認定された。
その噂を聞きつけた今の父、つまり義父が本格的な検査を行い、勇者属性が本物だとわかった時点で私を養子に迎えたのだ。
しかし名家に迎えられたからと言って、その後の生涯が豊かで恵まれたものであったわけではない。
もとよりこの家は、世界中に密偵を放ち、勇者や魔法使いや格闘家の適性のある子どもを見つけては、検査を行い片っ端から養子に迎え続けていたのだ。
実を言うとこの家だけでなく、この世界にある勇者系貴族の家は、多かれ少なかれ同様のことをやっている。
それぐらい世界を救えるスキルを持って生まれた人間は、数が少ないのだ。
だからこの家でも、養子に迎えた子が勇者属性であったからと言っても、ただそれだけでちやほやしてくれるわけではない。
その才能が優れたものであったとわかってはじめて、厚遇してくれるのだ。
何しろ養子・実子を問わず子供の能力が貴族としての勢力の大小を決定づけるので、当主は必死になって適性検査を繰り返す。
私もこの家に来てから、何度も検査を受けた。
その結果は…「極めて高い勇者魔法の使い手としての才能がある。だが困ったことに魔力が決定的に足りない」とのことであった。
この報告を聞いた義父は頭を抱えた。
単に勇者適性があってもその能力が成長しないのなら、家から放り出すのがこの家の、いや貴族の家すべての「常識」である。
だが私の場合、「埋もれた才能」はあるのだ。
その才能を発揮する土台が育ってないだけで。
悩んだ結果、義父はとりあえず私を追い出さず、家に置いておくことに決めた。
当然、その扱いは非常にぞんざいなものになる。
やがてこの家の実子、私から見れば義妹にあたるリリに、１００年に一人レベルの大魔法使いの才能が眠っていた、ということがわかると、私への待遇はさらに悪いものになった。
私とは違い、リリは適性があるとわかった直後から、順調にその才能を成長させている。
彼女は幼女時代にすでに、何十年も修行を重ねたものでなければ使えなかった高位魔法を自在に使いこなしていた。
今では普通の人間には使えないはずとされていた、魔界や天界の住人の魔法すらも、使えるようになっているという。
こうまでリリが成長してしまうと、私はますます不要な存在となる。
普通ならとっくに追い出されていたところだが、そうはならなかったのは、私がリリの「お気に入りその二」だったためだ。
「お気に入り」とは言っても恋人とか友人とかそんなのではない。

単なる玩具として気に入っていたのだ。
私が、自分の中の人が実はおっさんだと気づいたのとほぼ同時期に、彼女もそれに気づいていたようだ。
以後リリは、ことあるごとにそれをネタにして、私をいたぶってきた。
「なんなのあんた。心がおっさんなのにこんなエッチなしたぎを身に着けようとか。気持ち悪い」
「言葉でいじめられる度に興奮しちゃうとか、信じらんない」
とまあ、こんな調子だ。
私が第二次性徴期を迎え、いたぶられて悦ぶ感覚と性的快感が結びつくようになると、リリのいじめはさらにエスカレートした。
ピンヒールを穿いた彼女の足で踏みつけられながら、オナニーを強いられたり。
下腹部に「男を求めています」「ご自由にお使いください」「前でも後ろでもＯＫです」などと落書きされ（しかも魔力が込められているので夜道でも光る）、全裸で夜の街を一周させられたりと。
人間の限界を遥かに超えた魔力を使いこなせるリリは、本来ならば限りなく神に近い存在だ。
そのまま天界に招かれてもおかしくないにも関わらず、今なおこの地上に留まっているのは、この性格のせいなのだ。
とある高位聖職者がリリに「それを改めさえすればすぐにでも天界入りできるので、悔い改めなさい」と勧めたことがある。
だがリリは、即座にそれを断った。
「天界にはネムがいないんでしょう？　ネムのいない天界よりネムのいる地上の方がアタシはいいわ」
…何も知らない人が聞いたら感動的なセリフだと勘違いするかも知れない。
だがその私でも、リリの「お気に入りその二」でしかない。
「お気に入りその一」は他にいるのだ。
格闘家で、名をギドという。
この世界では、格闘家というのは格闘技好きの一般人が修行してなるものではない。
格闘家の素質、というものが存在し、それがあるものだけが格闘家として認定されるのだ。
認定を受けていないものは、単なる暴力好きのチンピラ扱いされる。
ギドは数年前まで、「暴力好きのチンピラ」でしかなかった。
だがリリが彼女の中に類まれなる才能が眠っているのを発見し、その場で「格闘家」として認定した・
当時すでにリリは魔法使いとしてはほぼ人外規格であると国の上層部にまで認められていたので、こういう勝手なこともできたのだ。
誰も彼女の勝手を責めず、それどころか「あまたある貴族家のスカウトを潜り抜けた在野

の大才をあっさり発見するとはさすがリリ様」と褒め称えた。
これ以降一部の冒険者の間で「さすがリリ様」を短縮した「さすリリ」という言葉が流行し、今でも酒場や宿屋の掲示板に書かれるようになっている。どうでもいいことだが。
ギドの役割は、このように人気も絶大な「リリ様」の率いるパーティーの「盾兼切り込み隊長」だった。ちなみにこのパーティーには、「名前だけでも勇者がいないと格好がつかないじゃない」というリリの発言により、私も参加させられている。開戦即戦闘不能の連続ではあるのだけれど。
私がこんな感じに不甲斐ないせいか、リリのギドに対する期待は高まっていった。ギドもその期待に応えてめきめきと力をつけていった。
やがてギドはリリの命を受けて単独で魔王に挑み、見事これを撃破して帰ってきた。
国王や高位聖職者、一部の貴族には知らされたが、情報は極秘とされ、一般には公開されていない。
だから国民は、ギドの本当の実力を知らないのだ。
ただ人気絶大なリリ様の傍らに騎士のごとく侍っている、豪快な印象の女格闘家だと思われている。
よく見れば顔立ちは整っているし、言葉遣いはリリ以外には概ね乱暴（これもあまり一般には知られていないが、商人たちと売買の相談をする時も敬語である）だが、竹を割ったような性格のおねえちゃんとして、庶民の人気も急上昇中である。
一部では、リリを「姫」役、ギドを「騎士」役に見立ててあまり上品ではない妄想をする娘たちもいる、という噂もある。
結論から言えば、その妄想は限りなく事実に近い。
違ってるのは、リリがギド相手にしていることは、巷の娘たちの妄想内容よりも三回りぐらいハードなものだし、彼女たちの妄想内には登場しない私が、現実には二人の「大人のおもちゃ」として重要な役割を果たしている、という二点だ。
そんなこんなで、私はこの世界では、「必要なもの」だと考えられている。
ただし人として求められているのではなく、あくまで「おもちゃ」としてだ。
人扱いされないことの苦しさに、「逃げよう」と思ったことも何度もある。
だが、相手は世界に名を知られた大魔法使いである。逃げる場所などありはしない。
この世に逃げる場所がないのなら、あの世に逃げるしかない。
どうせ転生するのだ。このまま自分が永久に消えてしまうわけではない。
にも関わらず、これまで死を選ぶことはできなかった。
どこかしら、微かに、いや、実はかなりしっかりと、未練があるのだ。この生活に。
勇者として認めたくはないし、認めるべきではないのだが、いじめられるのが嬉しいのだ。
リリに。

## 2．奴隷オークション

酷い旅だった。
ジュールッパ連合までの長い長い道のり、確かにギドとリリは私についてきてくれた。
だが道中のそこここに登場する賊に対して、私の身を守ってくれはしなかった。
この道中、私は「暑いからこれ着ていなさい」とリリに言われ、胸と腰だけを申し訳程度に覆う粗末な衣服をまとっていた。
まあ裸よりは幾分マシだった、という程度だ。
道中、賊が出現すると、まずギドが気合を入れて拳を突き出す。
すると拳の先から衝撃波が発生し、私の服を吹き飛ばす。
目の前にいた女がいきなり裸になったので、賊たちは本能の命じるままに私を取り囲み、犯そうとした。
むくつけき男たちが私の身体を嬲りものにし、最初の男がいざ挿入、という瞬間を見計らって、リリが「その人心は男ですよ」と言う。
この結果不思議なことにどの賊もマ〇コへの挿入は諦め、私の口を使って欲望を解消しようとしたのだった。
おかげこの度の途中、私はとんでもない量の精液を飲まされた。
間違いなく、普通の飲料よりも、精液の方が飲んだ量は多かったろう。
ちなみに出現した賊は人間だけではなく、オークもいればゴブリンもいた。
オークは以前のあいつのように大量の精液を何度も何度も放出するので、出される度に最初の屈辱が思い出され、気分が悪くなった。
途中一回だけ、リリに抗議をしたことがある。
どうして私が賊にフェラチオする方向に持って行こうとするのか、と。
リリはしれっとして答えた。
まずリリやギドが手を出すと間違いなく相手の命を奪ってしまう。いくら賊とはいえそれはかわいそうだ、とのこと。
フェラチオに導くのは、私の貞操を心配してのことだ、とも言う。
「だって突っ込まれちゃうよりマシでしょう。妊娠だって避けられるし」
大嘘だとわかってはいるが、こういう言われ方をすると反論できない。
最後にリリはこう言った。
「だってお姉さま、フェラチオしている時凄く嬉しそうな顔してるんですもん。アタシあの顔が見たくなってついついそういう方向に誘導しちゃうのよね」
これだけ半分本音だな、ということはわかった。
いや、その前の話も、結構本音は混じっているのだろう。
ギドもリリも、本質的な部分はとてつもない善人であり、闇の部分はほんのわずかしかな

い。世の人々を守り、幸せに暮らさせてやろう、と常に考えているのが、彼女らの真の姿だろう。
ただわずかな闇の部分が、残らず私の方に向けられている。それだけの話なのだ。
理屈ではわかるのだが、感情では理解しきれているか、どうか。
それは自分でもわからない。
一面では毎回自分に酷いことをするリリとギドを憎んではいる。
しかし、世界を救おうとするリリやギド以上に強い気持ちで彼女らを憎んでいるかというと、とてもそんな自信はない。
気持ちの強さ、大きさという点でも「ダメな奴」なのだ。私は。
（正面からあの二人を憎みきれるだけの気力があったら、魔王になれるだろうけどな）
だからと言って二人を愛せるか、というとこれにもまた疑問符である。
彼女ら二人に闇の部分は少ししかないのだが、私に対しては一切の遠慮なしに、それをぶつけて来る。
肉体的精神的にこれは堪える。
殴られたり蹴られたりしたのに、喜べる人間はこの世にいない。
いない…よね。あれ？
どうなんだろう…なんかこんなところでも弱いな、私は。

「さてお次は遠く東の国からやってきた女勇者だよ！」
エキゾチックな衣装をまとった男が、声を張り上げる。
本来なら何を言っているのか意味が理解できないはずだったが、事前にリリが「翻訳の魔法」をかけてくれていた。
これでどこへ行っても問題なく意思疎通はできる。
しかもこれ、効果は一生モノだという。便利この上ない。
それはともかく、ここは奴隷オークションの会場である。
私たちは昨日ジュールッパ連合に到着した。
まずは数日旅の疲れを癒やして、それからオークションに行こう、という話だった。
しかし今朝になっていきなりリリが「どういうところか見学に行こう」と言い出し、連れ立って出かけたらこうなった、というわけだ。
私は今、手枷をつけられた状態で台の上に立っている。
下半身に面積が限りなく小さい黒い布をまとっただけで、上半身は剥き出しである。
（どう考えても今私、売られているよね…）
この状態で「リハーサルだよ」という奴はほぼいないだろう。
台の上から、下に並んでいる「買い手」の顔を見る。
あまり数は多くない。いくら未開の地だとは言え、最近では他国の影響を受け、人身売買が下火になっているからだろう。

だがその分、集まっている面々の顔はすべて凶悪そうだった。
買い取った奴隷の命の価値はそこらの羽虫の羽より軽く、犯すも殺すも自分の胸ひとつ、という考えの持ち主だということが、ひと目見ただけでわかった。
（こ、こんなのに買われたら、その日のうちに前後ズボズボに犯されちゃう…！）
「さてでは始めましょう！　１０００ゼーニから！」
数人が手を上げた。価格が釣り上げられる。
これが数回繰り返されたが、２０００ゼーニになったところで、動きがぱったりと止まった。
（に、２０００ゼーニだと、装備を買い直すことができない…！）
焦った。
まさかこんなことになるとは、思ってもいなかった。
自分で言うのもなんだが、私は女としては結構見てくれのいい部類に属している。
だから奴隷として売った場合、すぐに1万ゼーニぐらいの値段はつくと思っていた。
しかしその自信が、今根底から崩れてしまったのだ。
台の下で買い手がぶつくさ言うのが聞こえる。
（確かに上玉ではあるが、単にキレイなだけじゃなあ）
（そうそう。美人を抱くだけなら遊女屋に行けばいいしな）
（もうちょっと何かデキる、ってとこ見せてもらわんとな）
私の顔色が変わったのを見たオークションマスターは、「こいつ買い手が何言ってるかわかってるな」と気づいたのだろう。
目で「何かデキることはないのか」と聞いてきた。
「あ、あの～、歌が歌えるとかじゃダメでしょうか」
オークションマスターは黙って首を横に振った。
「えーっと、あ、そうだ。駆け出しだけど勇者認定受けてまーす」
また首を振られた。
私は焦りつつ、また台下を見た。ずっと後ろの方にリリがいる。
助けを求めるような私の視線に気づいたリリは、同じく目で「ダメよ」と言ってきた。
（もう少し値段を釣り上げてもらわないと、1万ゼーニって手を上げられないわ。頑張ってねお姉さま）
えーと…。
とにかくここはもう少し自分の力で頑張らなければならないのか…ど、奴隷として価値が高いと思われるスキルって何かあったっけ…。
「あ、そ、そうだ！」
いきなり素っ頓狂な声を上げたので、オークションマスターだけでなく買い手たちも驚いたようだ。彼らの視線が一斉に集まる。

「わ、私！　ふぇ、ふぇ、フェラチオっ！　得意ですっ！」
途端に値段が２５００ゼーニまで上がった。でもそこで止まった。
「ふ、普通のフェラチオじゃないですっ！　オークの極太チ〇ポでも、奥まで呑み込んでみせますっ！　し、舌づかいもこんな感じでっ！（れろれろ）」
３０００ゼーニ。
涙で視界がぼやける。が、次の瞬間ぼやけた視界の中をこちらに近づいてくる人影を見て、私ははっとなった。
「ギド！」
ギドは台下まで来ると気合を入れながら飛び上がり、高い位置で一回転してから足を揃えて台上に降り立った。観客席から「おお…」というどよめきが聞こえる。
「ご来場の紳士淑女の皆さん！」
そうは言うが「淑女」はリリ以外一人もいない。男はいるが果たして「紳士」と呼べるものがいるかどうか。
そういう私の心のツッコミとは関係なしに、リドは声を張り上げる。
「これなる東方の女ネム！　実は勇者属性とともにＭ属性も持っているという逸品！」
買い手の男たちが小声早口でささやき合う。何を言っているのか聞こえないけれど、「Ｍ属性」という言葉に反応したことだけはわかる。
「さあ、これをご覧ください！」
そう言ってギドは、トゲだらけのムチを振り上げた。
彼女を見ながら目をぱちくりさせている私にリアクションせず、ギドは私の背中を蹴りつけた。
私は前のめりに倒れ、（手枷が嵌められているので）自動的に四つん這いになる。
ギドはさらに足で軽く蹴って私の姿勢を変える。
私は観客席に向かって尻を突き上げ、脚を開いた格好になった。
開いた脚の間から、顔が見えるようになっている。
リドはさらに懐から妙なものを出した。それは丸い小さなボールに、紐がついたものだった。異世界からの伝来物で、「ギャグボール」と呼ばれるものだということは、それからずっと後になって知った。
リドは手際よくそれを私の口に嵌めた。
「この女がいかに我慢強いか、まずはそれをご覧ください！」
言うなりギドは、私の尻をムチで叩き始めた。
世界最強クラスの武闘家が、遠慮会釈なく繰り出す一撃である。
痛いとか痛くないとかの話ではない。
一発食らうごとに、命が口から飛び出して来世の先まで飛んでいきそうに思えた。
腰回りを覆っている布は、元々面積が最小限なので、尻はほとんど全部露出している。
それがみるみる真っ赤に染まり、ミミズ腫れが縦横に走る。

「ほうら全力で叩いてもミミズ腫れだけで済んでる！　どうです丈夫でしょう！」
ほんとだ私丈夫だったんだ…と自分で呆れた。
いやひょっとすると、勇者にはＨＰが１になってもそのまま踏みとどまれるとかそういうボーナスがあったのかしら。
まあ、戦闘不能になってもしばらくすれば勝手に復活できる、ってのはあるって聞いたけど。
そういうことを考える余裕が出てきたのだから、私、というか勇者の肉体は予想以上に頑丈なものであったらしい。
だが、私があまり痛そうな表情をしなくなったものだから、買い手の方は次第に白けてきたようだ。
台下のぼそぼそが聞こえなくなり、よく見ると誰もが「次の奴隷はどんなかな。このオークションさっさと終わらないかな」という表情になっていた。
ギドもこうなれば、打つ手なしと思ったのだろう。
尻を撃つムチが止め、私の顔を見て「どうしよう？」という表情になった。
ど、どうしようも何も。
こ、これだけ痛い目にあったのに、効果ゼロって？
と、無言で見つめ合う二人の耳に、たたたと軽い足音が聞こえてきた。
やがて「たんっ」と地面をける音がして、次の瞬間私とギドの間に、ふわりと小柄な少女が降り立った。
「リリ！」
打ち合わせでは、リリはずっと買い手の席にいて、売値が１万ゼーニに近づいた時に一気に値段を釣り上げ、私を落札する予定だった。
だが肝心の値段が一向に上がらないので、業を煮やしてここに上がってきたらしい。
（か、買い手席にいなくて大丈夫？）
（大丈夫よ）
（ど、どうするの？）
（一万ゼーニまで値段を釣り上げて、買った人からさらに買い取るわ）
私とリリは、目だけでこれだけの会話を行った。
「ご来場の皆さん！」
リリが可愛らしい声を張り上げる。
「これは私が住む国よりも、さらに東方にある『フソウ』の秘宝九尾の鞭！」
見た瞬間私はあっとなった。
リリの言うとおり「本物」だったからだ。なんでこんなものをリリが。
九尾の鞭は世界に鳴り響いた超強力な武器で、フソウの国宝である。
普段は国の宝物庫の奥深くに保存されており、よほどの者でなければ触れることもできなかったはずだが…。あ、そうか。

（リリはよほどの者以上だった…）
リリはこの至宝を使いこなすことができる数少ない人間の一人である。世界の対魔物安全保障の要になっている、いわば生ける戦略兵器であるため、「必要がある」と言えばフソウ政府だって二つ返事で貸し出してくれるはずだった。
会場がまたどよめきに包まれる。どうもこれが本物の九尾の鞭だということを理解したものが会場内に少なからずいたらしい。
それは同時に鞭を振り上げた少女が何者であるか、ある程度見当をつけられたということでもある。だがこいつらに正体を知られたところで、リリがどうにかなるわけではない。
何しろ、その気にさえなれば、ジュールッパ全体を向こう数世紀人が住むことのできない焼け野原にすることだって可能な女なのだ。
さてその物騒な女が、同じぐらい物騒な武器を振り上げた。
「はいーっ！」
明るい声を張り上げて、私の尻を叩く。
華奢な少女だが、魔力が篭っているのでそのトータルの力はギドが殴ったものより軽く十倍は強い。
振り上げられた瞬間、「九尾」の名前の元になっている９つに分岐したそれぞれの鞭がドラゴンと化し、咆哮を上げながら全力で体当たりしてくる。
通常これを食らうと、相手は死ぬ。
手加減など微塵もなかったのだが、私は死ななかった。
「ほうら丈夫なのがわかったでしょう。もっとやってみますね！」
そのままリリはきゃっきゃと笑いながら、私の尻を叩き続けた。

私は一発食らうごとに銀河が爆発するってこんな衝撃なんだろうな、と思わされた。

しかし死なないどころか、失神すらもしなかった。
人間、あまりに受けた痛みが激しすぎると、失神することすらできなくなるのだろうか？
この世でリリに次いで二番…いやそうとまで行かなくても五本の指には必ず入るギドが、ぽかんと口を開けて見ているのだから、よほど凄まじい打撃だったのだろう。
ギドも「なんで生きてるんだこいつ」という顔で見ている。いやそれはこっちが聞きたい。
「あらぁ～」
突然、リリが驚いたような声を上げた。
「お姉さまなんですかぁ～。お股からいやらしいお水が出てますよぉ～」
リリはもうなりふり構っていられないのか、私をお姉さまと呼んできた。今までの行動でリリの素性はほぼバレているから、これで私が何者なのかもある程度わかってしまったわけだ。
私は驚いてリリの顔を見たが、リリは「バレたってどうってことないじゃない」と表情で答えてきた。
我が妹（義理だが）ながら大した開き直りである。
「アタシに叩かれたから感じちゃったんですかぁ～」
リリはそう言いながらばしばしと私の尻を叩く。
これまでの累積ダメージは、これまで世界を危機に陥れた魔王を三人ほど完全消滅させても余りあるほどである。
私の尻は真っ赤になっていたが、ミミズ腫れからは出血らしい出血もない。
だが、尻の間にある割れ目の方はというと…みだらな液体をたらたらと湧き出させていた。
垂れた汁は、太ももを伝わって床まで流れていたので、遠くから見ても「あいつ濡れている」ということがわかっただろう。
かくしてその場に集まった奴隷の買い手たちは、世界最強の魔法使いの全力攻撃でも消滅もせず、耐え抜くだけでなく感じて愛液を垂れ流す、というおかしな女のショーを見せつけられることになった。
滅多に見られるものでなかったのは、わかる。
が、そのショーを見て驚くことと、そのショーの主役となった女を買おうと思うことは、完全に別問題であった。
最終的な私の落札価格は３００１ゼーニ。
まあ要するに、私の価値はその程度なのである。

３００１ゼーニ出して私を奴隷として買ったのは、とある売春小屋の経営者だった。
ひと目見て、人格破綻者だということがわかった。
あの凄惨なショーを見てたとえ１ゼーニと言えども値段を釣り上げたんだから、それはそれで大した度胸の持ち主である、とは言える。
だがそれは同時に、人間的な感情の持ち主ではない、ということも意味していた。

「ど、どうするの、どうするの」
落札された奴隷は、オークションすべてが終わるまで、控室代わりのテントに送られる。
そこに顔を出したリリとギドに、私は泣き顔で訴えた。
「全然計画通りに行かなかったわね」
リリが困った顔をする。
「一応、事情を話して代金３００１ゼーニに加えて、６９９９ゼーニも出してもらったわ」
「じゃ、じゃあもうこんな茶番は終わりで、屋敷に帰れる…」
「そうはいかないの」
リリがいきなり真面目な表情になった。
「自分の身体を１万ゼーニで売れなかったのは、誰の責任かしら」
「それは…」
「お前だろ」という言葉が喉まで出かかっているが、言う度胸はない。
言ったら今度こそ絶対消滅させられるかも知れない。
この沈黙を「責任は私にある」の意味だと解釈したリリが、話を続ける。
「最初に言ったでしょう。これはお金の問題じゃないの。意識の問題なのよ」
「う…」
「お金を全部負担して、ここからお姉さまを連れ帰るのは簡単よ。でもそれが一体誰のためになるの？」
「それは…」
「責任を感じてちょうだい、お姉さま。そして少しの期間でいいから、苦労をしてきて欲しいの」
「す、少しの期間って、どれぐらい？」
リリに代わって、ギドが答える。
「不足分６９９９ゼーニは、売春小屋の給料から天引になるそうだ。計算してみたら、７００年股を開いて男にヤらせれば、払いきれることになるな」
「な、ななひゃくねん？」
目が点になる。
「あ、ごめんなさいお姉さま。７００年じゃなかったわ」
「そ、そうだよね」
少しホッとする。
「利息分と、ここまでの往復の旅費分も含めると、９８８年で完済ってことになるわね」
「ふ、増えてるじゃない！」
「大丈夫よぉ。年取って稼ぎが悪くなったら若返りの魔法かけてあげるから。そうすればまた全身ぴっちぴちになって何本でも男咥えられるわよ。
お姉さま。
これも勇者としての試練よ。勇者はいろんな試練を経て、大きく成長するんだから」

「う…」
「奴隷に落とされた勇者は何人もいるわ。石に変えられて何年も野ざらしにされることに比べれば、ただ脚開いて気持ちいいことしてればいいだけなんだもの。こっちの方がずっと楽よ」
「…」